

大学生の友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の 関係に関する研究

鈴木 真波 浅川 潔 司
(兵庫教育大学)
南 雅 則 祁 秋 夢
(宝塚市立高司中学校) (兵庫教育大学)

本研究は大学生の社会的スキルが、彼らの大学への登校回避感情にどのような効果を持つのかといった問題について検討するために企図された。本研究においては、大学生176名（男子学生群77名 女子学生群99名）が研究協力者として調査研究に参加した。社会的スキルの測定のために曾山・本間・谷口（2004）が開発した測定尺度が用いられた。登校回避感情測定尺度は、渡辺・小石（2000）により作成された尺度が用いられた。主たる分析結果は以下の通りであった。すなわち①集団参加技能に関していえば、このスキル得点の上位群は下位群に比べて有意に低くなっていた。②向社会的技能は、当該得点の下位群が他の群の得点より有意に高い得点を示していた。③他者への配慮技能は、どの群にも有意な差は見られなかった。

これらの結果について、考察が加えられた。

キーワード：社会的スキル, 大学生, 友人関係, 登校回避感情

鈴木 真波：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻・大学院生，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

E-mail：felicital113@yahoo.co.jp

浅川 潔司：兵庫教育大学大学院・臨床・健康教育学系・教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

E-mail：kasa@hyogo-u.ac.jp

南 雅則：宝塚市立高司中学校・教諭，〒665-0868 兵庫県宝塚市中山荘園3-10

E-mail：nanchangenki@nifty.com

祁 秋夢：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻・大学院生，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

E-mail：qiqiumeng@gmail.com

The Relations between Social Skills and Feelings of School Avoidance in Collage Students

Manami Suzuki and Kiyoshi Asakawa (*Hyogo University of Teacher Education*)

Masanori Minami (*Takatsukasa Junior High School*)

Qiumeng Qi (*Hyogo University of Teacher Education*)

The present study was designed to investigate how the social skills have effects on the feelings of school avoidance in college students. One hundred seventy-six students (77 males and 99 females) took part in the study. The social skill inventory developed by Soyama, Honma, and Taniguchi (2004) was used for measurement of social skills in college students. Watanabe and Koishi's. (2000) Scale of negative feelings of school was used for measurement of school avoidance in college students. Main findings were as follows;

- 1) As to social skill of group entry, A significant main effect was found in The level of that skill,
- 2) As to prosocial skill, students with lower prosocial skill showed significantly higher scores of school avoidance than students with higher prosocial skill and with medium prosocial skill,
- 3) As to social skill of respect of the others, none of significant main effects and interaction were found out.

Those findings were discussed from the viewpoint of adolescent psychology.

Key Words: Social skill, University student, Friendship, School avoidance

Manami Suzuki :Graduate student at Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: felicit1113@yahoo.co.jp

Kiyoshi Asakawa : Professor, Psychology Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

Masanori Minami : Teacher of junior high school at Takatsukasa, 3-10 Nakayamashoen, Takarazuka-city, Hyogo 665-0868 Japan, E-mail :nanchangenki@nifty.com

Qiumeng Qi : Graduate student at Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: qiqiumeng@gmail.com

問題と目的

小学校・中学校で不登校が大きな問題となって久しい。井上・佐藤（1988）は、不登校を「家庭の中にも学校の中にも、登校できないようなはっきりした理由がないのに学校に行こうとしない状態」と定義としたが、文部科学省（2006）によれば「不登校とは何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし病気や経済的な理由による者を除く）」と定義されている。このように本来は異質であるはずの怠学的不登校と神経症的な登校拒否が混同されるなど不登校の形態も様々である。さらに、子どもを取り巻く社会的状況は変化しており、それに応じて不登校の様態も変化すると考えられる。したがって登校拒否を含む不登校全般に対して、明確な定義をくだすのは難しい。

社会学的な観点から不登校を検討した森田（1991）は、欠席も遅刻・早退も示さない出席生徒にみられる「学校に行くのが嫌だ」という気持ちを“登校回避感情”とよび、この学校に行きたくないという登校回避感情を抱きながらも欠席せずに学校に通っている児童・生徒が相当数存在することを報告している。また、渡辺・小石（2000）は、登校回避感情を有する生徒の特徴である自尊感情の低さや不安の高さは、不登校の生徒に特有であるといわれているパーソナリティ特性と類似していると指摘しており、このようなことから登校回避感情の高い児童・生徒は不登校に陥り易いと考えられるだろう。

そこで本研究では、登校しない、したくともできないという不登校を検討するのではなく、学校に行きたくないという感情を抑制する要因について検討することが問題を直截的にとらえるには適切と考えられ、不登校に対する予防的対応を考える上でも有意義であると思われる。

大学における不登校について小柳（1999）は、大学生の抱える適応の問題として、小学校の高学年から対人関係がうまくいかないと感じ始めるが恥じて親しい他者に相談できなかつたり、周囲が理解できなかつたりしたために、この登校にまつわる問題の解決を持ち越して大学に入学するに至るといふ、対人関係のあり方の影響を指摘している。つまり小学校から大学に至る間、ほとんど友人関係もなく学業に専念し、辛さに耐えて登校を続けるが、大学に入ると学業に優れているだけでは容易に評価されず、このため学業という心の支えが崩れやすく、緊張による疲労とも相まって大学での不登校が始まるという。

大学においても不登校の学生は相当数に上っている。大学は人間関係や生き方が青年から大人へと移行する時期であるが、友達と共有できる話題が少なかつたり、自分らしい価値観や、臨機応変に対応する柔軟さや知恵が

少なかつたりと、登校への障壁をうまく乗り越えることが困難となる。したがって対人関係や関心の幅広さが大学での適応の重要な鍵となる（小柳，1999）。こうしたことから、不登校のきっかけや維持要因として、人間関係や情緒的混乱などの心理的問題が大学生生活での適応に関連していることが理解される。

ではこのような大学生の心理的な問題の解決のためには、どのような取り組みが必要なのであろうか。他者と適切かつ効果的に人間関係を構築していくための技能である社会的スキルが、十分に学習されていない（松永・岩本，2008）ということ指摘するまでもなく、社会的スキルの欠如に起因している可能性は高いといえる（橋本，2000）。したがって、大学生の心理的な問題の解決にあたっては、社会的スキルの獲得がその一つの方策であると考えられる。

ところで大学生の不登校の問題に関して、久保（1995）は、大学生の現在の悩みやコンプレックスにおいて友人関係に関するものが全体の25%に上ることや、悩みの対処法に関しては自分を受容してくれる他者を持つことや、積極的に人間関係を築いていくことで対処する者が多く、人間関係に悩み、さらにその悩みを人間関係の中で解決したり癒したりし、その中で自分らしさを感じたり生きていると感じたりしていることが多いと述べている。

さらに、学校適応に関する予防的援助の方策のひとつとして、社会的スキルからのアプローチを検討した八越・新井（2007）は、社会的スキルを仲間との相互交渉に必要なスキルと定義し、友人関係、社会的スキルそして学校適応の間には一義的な関係があることを明らかにした。すなわち仲間との相互交渉に必要なスキルあれば、共感性が高まり友人関係がうまくいく。そして、学校へ行きたいと思う気持ちを促進することができるという。

もし、友人関係のありようが児童・生徒あるいは学生の学校への登校に影響があるとすれば、友人関係と学校適応の関係の関係を明らかにすることは意義深い（石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口，2009）といえる。

相川（2000）は、社会的スキルとは、良好な人間関係を形成し、維持していくための具体的な技術やコツの総称としており、社会的スキルの水準が高ければ、人間関係を円滑にすることができると考えられる。さらに先に述べた小柳（1999）の見解からも、学校は集団生活の場であり、他者とコミュニケーションをとることがその適応に重要であることがいえる。これらのことから他者との関係、つまり人間関係を円滑にすることができれば、学校適応感も増すとも考えられる。そして同時に登校回避感情も軽減することができると考えられる。

そこで、本研究では社会的スキルを、他者とのコミュニケーション能力と定義し、大学生の友人関係に関する

社会的スキルの水準が、大学生の大学への登校感情に及ぼす影響について検討することを主たる目的とした。

方法

研究協力者：静岡県下のA大学の1、2年生176名（男子77名 女子99名）が本研究の調査協力者として参加した。

質問紙：友人関係に関する社会的スキルの測定にあたっては、曾山・本間・谷口（2004）が開発した「友人関係に関する社会的スキル尺度（34項目）」が、大学生用にふさわしい言葉遣いに一部修正したものが使用された。「登校回避感情尺度（26項目）」は、渡辺・小石（2000）により作成された尺度を、大学生用にふさわしい言葉遣いに一部修正したものが使用された。なお、これら2種類の尺度に対する反応は、あてはまる（5点）～あてはまらない（1点）の5件法により求められた。

手続き：協力大学での授業のクラス単位に集団場面で質問紙冊子が配布され、各クラスにおいて共通した教示の

もとに実施された。なお教示は、研究者のひとりによってなされた。調査時期は2009年12月上旬であった。

結果

友人関係に関する社会的スキル尺度の因子分析結果：大学生の社会的スキルの特徴を見るために、友人関係に関する社会的スキル尺度34項目に対して、有効回答者（179名）の反応に基づき、因子分析（主因子法—バリマックス回転）が実施された。その結果、固有値が1.0以上であることと減衰状況から解釈可能な5因子が抽出された。このうち、第4、第5因子に関しては十分な内的整合性を有していないと判断されたため、本研究では、第1～第3因子までが分析の対象となった。各々の因子に含まれる内容の項目を考慮して、第I因子は「集団への参加技能」、第II因子は「向社会的技能」、第III因子は「他者への配慮技能」と命名された（表1参照）。

登校回避環境尺度の因子分析結果：大学生の登校回避感情の特徴を見るために、登校回避感情尺度（26項目）に

表1 友人に関する社会的スキル尺度の因子分析結果

尺度項目	FI	FII	FIII	FIV	FV
第1因子(集団への参加技能、 α = .875)					
6.自分から仲間に入れない*	.78				
1.遊んでいる友達の中に入れない*	.73				
7.友達に話かけられない*	.68				
5.友達が楽しそうにしているのをじっと見ている*	.66				
4.休み時間に友達とおしゃべりしない*	.64				
3.友達と離れて一人にいる*	.62				
2.友達に気軽に話しかける	-.57				
8.悩み事を友達に相談できない*	.54				
第2因子(向社会的技能、 α = .857)					
11.友達の悩みを聞く		.79			
10.友達が失敗したら励ましてあげる		.70			
31.友達の悩みや相談事をゆっくり聞いてあげる		.69			
9.困っている友達を助けてあげる		.61			
12.友達がよくしてくれた時はお礼を言う		.59			
15.自分に親切にしてくれる友達には親切にしてあげる		.58			
13.相手の気持ちを考えて話す		.45			
第3因子(他者への配慮技能、 α = .849)					
20.友達に乱暴な話し方をする*			.75		
22.友達のじゃまをする*			.74		
19.友達をおどかしたり、いばったりする*			.69		
23.何でも友達のせいにする*			.64		
18.自分のしてほしいことをむりやり友達にやらせる*			.61		
21.でしゃばりである*			.57		
第4因子(アサーション、 α = .718)					
27.先生に気軽に話しかける				-.70	
32.先生に話しかけられない*				.68	
30.授業の中で発言できない*				.63	
26.質問されても自分の考えをうまく話せない*				.49	
第5因子(かたくなさ、 α = .646)					
28.友達の失敗を許せない					.63
33.自分の意見と違う友達の考えを認められない					.62
24.間違いをしても素直に謝らない					.51
2乗和	13.91	12.64	11.69	6.97	4.99

*逆転項目

対して、有効回答者（179名）の反応に基づき、因子分析（主因子法—バリマックス回転）が実施された。その結果、3因子が抽出された。各々の因子に含まれる項目の内容を考慮して第I因子は「友人への依存」、第II因子は「教師への反発」、第III因子は「学校への反発」と命名された（表2参照）。

友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の関係：上述の分析結果に基づき、友人関係に関する社会的スキル尺度の3つの下位尺度ごとに、それぞれの平均値とS.D.に基づいて、各スキル高得点群（H群、平均得点+1/2S.D.以上）とスキル得点低群（L群、平均値-1/2S.D.未満）、および中間群（M群、H群にもL群とも属さない）の3群に分類された。各群の人数及び、平均得点、標準偏差を表3に示した。また社会的スキル各下位尺度別の性と水準別の登校回避感情得点平均と標準偏差は表4のとおりであった。そこで表4に基づき登校回避感情尺度の各下位尺度得点を従属変数、性と友人関係に関する社会的スキル尺度の各下位尺度得点水準を独立変数とする2（性）×3（社会的スキルの各下位尺度得点水準）の2要因分散分析を行った。

登校回避感情尺度の「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と集団への参加技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、集団への参加技能水準に主効果がみられ（ $F_{(2,170)}=151.56, p<.01$ ）、下位検定（Tukey法、以下も同様）の結果、L群>M群>H群（不等号は5%水準で有意差があることを示す。以下同様）という関係で有

意差が認められた。次に、「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と向社会的技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、向社会的技能水準に主効果がみられ（ $F_{(2,170)}=49.94, p<.05$ ）、下位分析の結果、L群>M群・H群という関係で有意差が認められた。性の主効果も有意（ $F_{(2,170)}=26.71, p<.05$ ）であり、女性より男性の方が有意に回避的であった。なお「友人の拒否」得点を従属変数とし、性と他者への配慮技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、有意な主効果、交互作用はみられなかった。

登校回避感情尺度の「教師への反発」においても同様の分散分析がされたが、主効果、交互作用はみられなかった。

登校回避感情尺度の「学校への反発」得点を従属変数とし、性と集団への参加技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、集団への参加技能の水準に主効果がみられ（ $F_{(2,170)}=27.52, p<.05$ ）、下位検定の結果、L群>M群>H群という関係で有意差が認められた。性に主効果がみられ（ $F_{(2,170)}=73.41, p<.05$ ）、女性より男性の方が有意に高かった。次に、「学校への反発」得点を従属変数とし、性と向社会的技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、性に主効果がみられ（ $F_{(1,170)}=20.24, p<.05$ ）、女性より男性の方が有意に高かった。なお「学校への反発」得点を従属変数とし、性と他者への配慮技能水準を独立変数とする分散分析を行ったところ、有意な主効果、交互作用はみられなかった。

表2 登校回避感情尺度の因子分析結果

尺度項目	FI	FII	FIII
第1因子(友人の拒否 $\alpha = .85$)			
14. 友達と一緒にいると楽しい	.80		
13. 仲のよいグループを持っていない	.72		
20. 友達から相手にされなくてもかまわない	.64		
18. 友達というより1人である方が気が楽だ	.63		
12. 親しい友人がいる	.62		
16. 友達と一緒に頑張って勉強や遊びのグループを作るのは嫌だ	.61		
15. 勉強以外のことを友達とよく話す	.60		
17. 友達との付き合いがうっとうしいと思う時がある	.51		
19. 友達とできるだけ交わるようにしている	.44		
第2因子(教師への反発 $\alpha = .86$)			
2. この学校に対して親しみを感ずる		.89	
1. 学校の先生に対して親しみを感ずる		.76	
3. 先生には安心して何でも相談できる		.68	
4. この学校の生徒であることを誇りに思う		.63	
第3因子(学校への反発 $\alpha = .78$)			
7. 授業を受けているのは苦痛である			-.69
6. 学校の授業の時間を無駄だと思うことがある			-.60
5. この学校に対して反発を感ずる			.56
9. 学校さえなかったら、毎日楽しいだろうと思う			.55
21. 学校を休みたいという気持ちになる			-.50
23. 学校は嫌なことばかりあると思う			.48
26. 私にとって学校はいごちが悪い			.42

説明率(%) 15.73 13.76 11.11

表3 社会的スキル下位尺度別の性と群の得点平均および S.D.

	性別	N	平均値		S.D.
			平均値	S.D.	
集団への参加技能	L	男	29	22.10	2.16
		女	25	22.08	3.53
	M	男	28	28.64	1.49
		女	35	28.71	1.80
	H	男	20	34.50	1.53
		女	39	34.13	1.67
向社会的技能	L	男	29	22.57	2.50
		女	21	23.24	4.01
	M	男	28	28.11	0.98
		女	35	28.56	1.08
	H	男	20	32.79	1.47
		女	39	32.74	1.17
他者への配慮技能	L	男	20	15.90	3.24
		女	35	16.31	2.40
	M	男	38	22.03	1.35
		女	30	22.30	1.55
	H	男	19	27.58	2.16
		女	34	27.24	1.99

考察

本研究の分析結果より、社会的スキルの下位領域すべてが登校回避感情に結びつくのではないが、いくつかの下位領域は登校回避感情に結びついていることがわかった。つまり社会的スキルの中には登校回避感情に影響を与えるものがあるということであろう。

社会的スキルの下位尺度ごとに見ると、集団への参加技能に関していえば、その高群より低群の方が友人を拒

否し、さらに学校への反発も高いということが明らかになった。さらに、社会的スキルの因子の向社会的技能の高群より中群、低群の方が友人を拒否しているということが明らかになった。小柳（1999）は人間関係が大学生の大学での適応に関連しているというが、上述の結果は小柳（1999）の見解を支持するものといえる。

一方、教師への反発という側面に関しては、社会的スキルのどの因子においても教師への反発得点に有意差は認められなかった。森田（2000）は、不登校群の生徒は出席群の生徒に比べて教師とのコミュニケーション回路の停滞している生徒が総じて多い傾向がうかがえるとしているが、今回の結果はこの見解を支持するとはいえなかった。

その要因としては、今回の調査対象が大学生1、2年生であり、小・中・高校生に比べて大学の講義以外で教師と関わるのが少ないのが一因と考えられる。このことから、今後は小・中・高校生を対象として同様の調査を実施することは不登校生徒への支援を考えるのに有効であろう。

社会的スキルの他者への配慮技能は、どの水準群間にも登校回避感情得点の有意差は認められなかった。登校拒否の子どもの中には本来の性格が明るく、リーダーシップもあり、友人によく配慮できるものもいる。たとえば、優等生の自切れタイプとされる児童・生徒がそうであろう。登校拒否の発現後に生育歴などを分析すると、

表4 社会的スキル下位尺度別の性と群の登校回避感情得点平均及び S.D.

	群	性	N	友人の拒否		教師への反発		学校への反発	
				平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
				集団への参加技能	L	男	29	24.21	4.47
女	25	22.88	6.56	13.64		4.22	18.52	5.46	
M	男	28	19.11	4.56	12.68	3.97	19.29	4.83	
	女	35	18.29	5.26	12.29	4.04	17.34	4.33	
H	男	20	16.15	7.20	12.50	4.63	18.45	5.91	
	女	39	14.00	3.03	12.92	3.26	16.85	4.58	
向社会的技能	L	男	29	22.70	6.17	14.00	3.88	19.70	6.20
		女	21	20.57	7.62	13.33	3.77	16.67	4.22
	M	男	28	18.71	5.60	13.07	3.45	19.11	4.88
		女	39	17.54	5.69	12.82	3.52	17.69	4.93
	H	男	20	18.68	6.19	10.63	3.99	20.53	6.22
		女	39	16.46	4.90	12.69	4.14	17.61	4.86
他者への配慮技能	L	男	20	22.95	6.79	14.25	3.74	21.10	6.00
		女	35	18.89	7.09	13.00	3.03	17.26	4.22
	M	男	38	20.03	5.47	12.53	3.61	19.84	4.78
		女	30	18.90	5.20	13.20	4.25	18.13	5.04
	H	男	19	17.89	6.20	11.95	4.54	17.89	6.86
		女	34	15.59	4.93	12.47	4.15	17.03	5.01

彼らは「みんなのお手本」として期待に応えることに努力し、彼らの内面には心理緊張と過分の自己統制による精神的疲労が積み重なっていると佐藤（1996）は報告している。今回の結果からも、他者への配慮技能があるからといって、登校回避感情が軽減されるということはいえなかった。佐藤（1996）にしたがうならば、他者への配慮技能は、むしろ、その技能を豊かに有している方が登校拒否に陥りやすいと考えられる。この技能が、登校回避感情に影響を及ぼしていないことから、登校拒否の前段階として登校回避感情があるとはいえない。

以上のことから、社会的スキルは全てが登校回避感情の軽減に効果を有するわけではないということが示唆された。そして、登校回避感情を抱えている学生と、登校拒否の学生が抱えている感情は一致するとはいえないということが示唆された。これらのことが、児童・生徒にも同様の結果が得られるかどうかを検討することは、今後の登校拒否問題の解決策や支援策を考える上でも有意義と思われる。

引用文献

- 相川 充（2000）. セクション社会心理学20 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— サイエンス社
- 橋本 剛（2000）. 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 井上 肇・佐藤修策（1988）. 登校拒否はなおる 山陽新聞社
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平（2009）. 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 2, 125-133.
- 久保克児（1995）. 大学生の悩みとその受け止め方に関する研究—自尊心と生の肯定感との関連で— 日本精神科学研究所
- 小柳晴生（1999）. シリーズ「心理臨床セミナー」④ 学生相談の「経験知」—大学における臨床心理— 垣内出版
- 文部科学省（2006）. 生徒指導上の諸問題の現状について(概要) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm
- 森田洋司（1991）. 「不登校」の現象の社会学 学文社
- 松永真由美・岩元澄子（2008）. 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究 7, 77-86.
- 佐藤修策（1996）. 登校拒否ノート 北大路書房
- 曾山和彦・本間恵美子・谷口清（2004）. 不登校中学生のセルフエスティーム、社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響 特殊教育学研究, 42, 1, 22 - 33.
- 鳥山平三（2006）. キャンパスのカウンセリング—相談事例から見た現代青年期心性と壮年期心性— 風間書房
- 渡辺葉一・小石寛文（2000）. 中学生の登校回避感情とその

規定要因—ソーシャル・サポートとの関連を中心にして— 神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 1, 1-12.

八越 忍・新井邦二郎（2007）. 母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 211.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

山田礼子（2009）. 大学生の学習・生活実態調査報告書 Benesse 教育研究開発センター

謝辞

本研究を遂行するにあたり、貴重なご意見とご助言を賜りました、常葉学園大学の伊東明子先生に心より感謝申し上げます。また、本研究に研究協力者としてご参加下さった、常葉学園大学の学生諸氏に、感謝致します。

(2010. 8. 30 受稿, 2010. 12. 16 受理)